

平成23年度 【 学園研究費助成金＜ B ＞ 】 研究成果報告書

学部名 看護学部

フリガナ イシイ ヒデコ
氏名 石井 英子

研究期間 平成23年度

研究課題名 A県における小児訪問看護の実態と課題

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	石井 英子	看護学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

在宅看護において医療的ケアを必要とする人は大人ばかりではなく、子どもたちも医療機器を装着し、医療処置を継続しながら家庭で過ごすケースが多くなってきている。現在、小児・障害児ケアに対応できる訪問看護ステーションは限られており、社会のニーズに対応できていない状況にある。他県における現状報告は見られているが、A県の現状を示したものはなく、看護協会の研修で現状を知ることができる程度である。

A県の訪問看護ステーションにおける小児訪問看護の現状と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法等 (300字程度で記述)

- ・ A県の訪問看護ステーションを対象として、郵送による自記式無記名の質問紙調査とする。(データ収集期間は平成23年9月～11月とする。)
- ・ 研究の主旨に同意が得られた場合、質問紙に回答し投函してもらう形式で回収する。
- ・ 調査内容：調査対象の背景、小児訪問看護実施の有無、小児訪問看護の実態、小児訪問看護の課題等。
- ・ 倫理的配慮：研究依頼書には研究の主旨の他に倫理的配慮についても記載し、質問紙は、無記名とし個人の匿名性を保証すること、また参加は自由意志であり、回収をもって同意が得られたものとするを明記する。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

小児の訪問看護を実施している訪問看護ステーション（以下、実施有りステーション）の職業形態における平均人数については、常勤では看護師 4.39 人、准看護師 0 人、保健師 0.13 人、理学療法士 0.61 人、作業療法士 0.04 人、その他 0.04 人であった。非常勤では、看護師 3.52 人、准看護師 0.09 人、保健師 0.13 人、理学療法士 0.26 人、作業療法士 0.26 人、その他 0.39 人であった。小児の訪問看護を実施していない訪問看護ステーション（以下、実施無しステーション）の職業形態における平均人数については、常勤では看護師 2.70 人、准看護師 0.30 人、保健師 0.03 人、理学療法士 0.70 人、作業療法士 0.23 人、その他 0.10 人であった。非常勤では、看護師 2.43 人、准看護師 0.20 人、保健師 0 人、理学療法士 0.87 人、作業療法士 0.13 人、その他 0.30 人であった。

小児科・NICU 看護経験者の有無について経験のある看護師がいる割合は、実施有りステーションでは 60.9%、実施無しステーションでは 43.3%であった。

実施無しステーションの過去に小児の訪問看護を実施したことがある割合は 20%であった。

実施有りステーションの平成 22 年度の月平均小児訪問看護利用者数は平均 3.08 人、現在の小児訪問看護利用者数は平均 0.39 人であった。年齢割合は、0 歳 21%、1 歳 19%、2 歳 17%の順で多く見られた。主な疾患については、先天異常 48%、脳性麻痺と脳・神経系疾患 15%、低出生体重児 10%の順で多く見られた。障がい者手帳取得者の 1 級 29 名のうち、身体障がい者手帳 28 名、知的障がい者手帳 1 名であった。

訪問看護ステーションへの依頼元施設は、病院 86%、県保健所と家族 5%の順で多く見られた。訪問看護ステーションの利用期間については、1 年以内と 1～2 年 30%、3 年以上 23%の順で多く見られた。訪問看護内容については、家族指導・相談 31%、リハビリ 18%、吸引 12%、人工呼吸器の管理 10%、入浴介助 9%の順で多く見られた。

4. キーワード (本研究のキーワードを 1 以上 8 以内で記載)

①小児	②訪問看護	③実態調査	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもの数件を記載。)

日本看護学会学術集会（地域看護）や日本在宅看護学会での発表を検討している。